

高等学校芸術科音楽における楽曲分析を取り入れた授業実践

— 歌曲〈初恋〉を題材にして —

廣瀬 千鶴
教科領域コース

1. はじめに

楽曲分析とは、曲をさまざまな要素にわけて分解しその内部構造における諸機能を調べることであり、作曲家や音楽批評家のみならず、演奏家や音楽講師などクラシック音楽を扱う人々によって取り組まれている。楽曲分析を行うことによって、聴くだけでは把握できなかった音楽の特徴をより細かく理解することができ、またそれにより細かなニュアンスや思いを演奏に活かし表現すること、又はその曲の魅力を言葉にして伝えることができる。このことを踏まえると、学校の音楽の授業でも楽曲分析を取り入れることで生徒の音楽的理解や表現を深めることができると考える。文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 芸術（音楽 美術 工芸 書道）編（以下、「高等学校学習指導要領音楽編」と記す）』芸術科の目標より「生涯にわたり芸術を愛好する心情を育むとともに、感性を高め、心豊かな生活や社会を創造していく態度を養い、豊かな情操を培う。」の観点からしても非常に重要なことであり、高等学校を卒業してからも音楽と自ら向き合っていく一つの手段として楽曲分析を活用することは大いに意義があると言える。

高等学校学習指導要領音楽編に〔共通事項〕¹が導入されたことにより、音楽的要素に着目して楽曲を捉え「音楽的な見方・考え方を働かせる」²ことが求められている。楽曲分析を授業に用いることでそれらの具体的な方法を提示することが可能になり、教科としての音楽を学ぶことができるようになる。

しかし、楽曲分析は読譜能力や多くの予備知識を必要とするため、生徒にとっては抵抗を感じやすいものである。そこでこれらの課題を解決し高等学校芸術科音楽でも取り扱える方法を考え、教育実習の中で実践してみることにした。実践を踏まえた考察に加え、改めて複数の視点から楽曲分析を取り入れた授業の実践モデルとしてまとめ、実践研究報告としたい。

2. 高等学校学習指導要領音楽編と楽曲分析の関わり

教材として楽曲分析を扱うために「高等学校学習指導要領音楽編」の「音楽Ⅲ」の目標(1)～(3)を以下に引用し、それぞれの目標と楽曲分析との関わりを述べていく。

¹ 平成21年度告示の『高等学校学習指導要領解説音楽編』から示された表現と鑑賞の支えとなる指導内容のことである。

² 平成30年度告示の『高等学校学習指導要領解説音楽編』では、感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、音楽の文化的・歴史的背景などと関連付けることであるとされている。

“(1) 曲想と音楽の構造や文化的・歴史的背景などとの関わり及び音楽文化の多様性について理解するとともに、創意工夫や表現上の効果を生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。”(下線は筆者による。以下同様)

音楽の授業では「曲の印象」と「その音楽を形作っている要素」を関わらせて作者の意図を自分なりに捉え、最終的にはその思いを音楽表現する。その過程で役立つものが楽曲分析である。

“(2) 音楽に関する知識や技能を総合的に働かせながら、個性豊かに音楽表現を創意工夫したり音楽を評価しながらよさや美しさを深く味わって聴いたりすることができるようにする。”

楽曲分析は「表現」と「鑑賞」の2つの領域のどちらにおいても活用することができる。「表現」では、楽曲分析したことを活かし音楽表現をより豊かなものにする。「鑑賞」では、扱う題材やお気に入りの曲を言葉にして人に伝える際に、一つ一つの要素に着目して説明することが可能になる。

“(3) 主体的・協働的に音楽の諸活動に取り組み、生涯にわたり音楽を愛好する心情を育むとともに、感性を磨き、音楽文化を尊重し、音楽によって生活や社会を明るく豊かなものにしていく態度を養う。”

具体的な楽曲分析のプロセスを指導し日常的に授業で扱うことで「音楽的な見方・考え方」が身につき、徐々に主体的に作品と音楽の構造や歴史的な背景との関わりについて調べるようになる。また、「分析をする」という新たな音楽との関わり方・手段が一つ増えることになり、生涯のわたり音楽によって生活を豊かなものにしていくことが可能になると考える。

このように、楽曲分析は高等学校学習指導要領音楽編で述べられている目標と対応していることがわかる。今後音楽の授業において楽曲分析は音楽をより深く理解する重要な方法になっていくと考えられる。

3. 授業実践

3-1. 題材〈初恋〉について

高等学校教科書音楽Ⅲ「Joy of Music」に記載されている石川啄木作詞／越谷達之助作曲の〈初恋〉を題材とする。越谷達之助は、歌曲の分野で優れた業績を残した人物である。〈初恋〉は今なお多くの人々によって歌われる名曲であり、拍子が何度も変化したり詩の一部が繰り返し現れたりして、作品の特徴と呼べる要素が比較的わかりやすい曲であることから、今回楽曲分析を行う題材として選んだ。

3-2. 授業実践

(1) 研究の対象

高校3年生の2クラス合同（女子11人）で行う。音楽が好きな生徒が多く、これから先も音楽と関わっていけるように音楽理論の調や音階、音程の学習を終えている。

(2) 実践の流れ

本授業実践は「越谷達之助作曲の歌曲〈初恋〉の楽曲分析を行い、自ら曲の特徴を探し出し思いや意図を持って歌で表現しよう」という「表現」〈歌唱〉の単元である。2時間扱いの授業とする。

【表1】は本題材の流れを1時間ごとに集約したものである。

表1 本題材における主な学習課題・分析の種類・指導上の留意点

時数	主な学習内容	分析の種類	指導上の留意点
1	楽譜から読み取れる情報を整理して、この作品の特徴を探そう。 ① 〈初恋〉を歌う。 ② 〈初恋〉の楽譜に書かれている情報をワークシートに記入する。 ③ グループでまとめたことを全体で共有する。	リズム 旋律 速度 強弱 形式 構成 曲の背景	● 歌曲なので歌のパートに目が行きがちだが、ピアノ伴奏にも作曲者のこだわりが詰まっているので、ピアノ伴奏だけの音源を聞かせることにより、楽譜全体に意識がいくようにする。 ● 調べる項目をあらかじめ示すことで、初めての活動でも取り組みやすいようにする。
2	作品の特徴と作者の表現意図を自分なりに考え、歌で表現してみよう。 ① 作品の特徴と表現意図を自分なりに考える。 ② 思いや意図を持って〈初恋〉を歌う。 ③ 振り返りをする。	音楽の構造 テクスチュア 曲の背景	● 既習曲であるポップス〈ひまわりの約束〉を取り上げ〈初恋〉と比較することで特徴を探しやすくする。 ● 表現意図の考察部分を限定することで、時間をかけて考えられるようにする。

3-3. 授業を終えて

楽曲分析をすることでどのように歌で表現をしたいかを根拠をもとに考えることができていた。また、【表2】のように班により感じ方がそれぞれだとわかった点も非常に興味深い結果となった。

表2 ワークシートより 作品の特徴となる部分を作曲者はどういった意図で書いたのだろう。
また、どのように思いを乗せて歌いたいのか。

1班	今まで長調だったのが短調に変わったり、ピアノ伴奏が音を伸ばしているだけだったりすることから、当時を振り返って思い苦しんでいる場面を表現していることから悲しい気持ちで歌いたい。
----	---

2 班	歌のパートの動きがかなり自由で開放的なことから、当時の苦しみをいい思い出として懐かしんでいる場面を表現しているため、明るい音色で歌いたい。
-----	---

少ない時間の中でも、楽譜に書いてある情報や作曲者の背景を丁寧に調べることで、その曲が持っている特徴や珍しい表現に気づくことができた。授業後の振り返りシートを見たところ、【表 3】のように音楽への関わり方に変化を感じた生徒がいることに気づくことができた。

表 3 振り返りシート より

生徒 A	一つの曲をここまで細かく調べるのは初めてで、自分なりにこの曲を解釈して歌うことができた。
生徒 B	分析は難しかったが、一つ一つ丁寧に行えば良いとわかった。

4. おわりに

この実践を通じて、楽曲分析を教材として活用することが音楽への関わり方に変化をもたらし、音楽的な見方・考え方を働かせた授業に繋がると実感した。

楽曲分析は、音楽家でさえも難解に感じる人が多い。しかし、音楽家が行う楽曲分析と教育現場でのそれはアプローチ方法に違いがあることを改めて認識した。音楽家は形式、メロディー、モチーフの形、リズム、和声進行など、音楽の基本的な要素から高度なものまで分析を行い、作曲者の意図やより豊かな表現方法を探求する。一方、教育現場では、音楽の基本的な要素に注目し、段階的に理解を深めていく。つまり、曲に対する理解度の深さは音楽家が行うものに及ばない。それでも「分析する」という新しい音楽との向き合い方を知ることや、演奏者として演奏と楽譜の接点を学習することは大いに意義があると言える。

音楽の授業ではこれまでによく「自分なりに表現する」という目標が掲げられていた。しかしそのために必要な具体的な考え方の提示が不足していたように思う。楽曲分析という手段を繰り返し活用することによって、表現に必要な技術や知識が徐々に身につき、「自分なりに表現する」という活動が扱いやすくなると考える。

また、音楽科の学習において、表面的な聴取だけでは学習内容が積み重なっていかないという問題も指摘されている。この問題の一つの解決策として、小学校段階から継続的に楽曲分析を行い、基礎的な理解を積み上げていくことが有効だと感じる。しかし、どの段階で楽曲分析を取り入れるべきか、またその内容をどのように進めるべきかについてはまだ十分に解明されていない部分が多いため、今後の研究課題として考えていきたい。

参考文献

- 1) 文部科学省 (2018) 「高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) 解説 芸術 (音楽 美術 工芸書道) 編」.
- 2) 畑中良輔 [ほか] (2024) 「Joy of Music」. 教育芸術社.
- 3) 及川慶太 (2022) 「中学校音楽科における教授法的楽曲分析の意義と実践方法の提案 : 3 年間の系統的授業実践の構築」. 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科芸術系教育講座博士論文.